

「あの世」の思考学（1）

2023年3月26記す

はじめに

①梅雨を思わせる雨の日である。庭の薄墨桜は散り始めたが、代わりに濃いピンクの花桃、真っ赤なシャクナゲの花が咲き始めた。先月植えた和シャクナゲがもうピンクの淡いつぼみをつけている。目を転じると、^{そよ}^{そよ}青は濃い緑葉を張り巡らし、夏椿の若芽も急に増えた。

こうして、華やぐ命を目にすると、若くして亡くなった友人、後輩、恩師たちが偲ばれる。過労死、病死、自殺とさまざまだったが、彼らはどんな無念の思いを抱えて、最後を迎えたのだろうか。

②この世には生と死が溶け込んでいる。しかし、世間はそんなことは忘れた風である。死はそこここに偏在しているのに、死など彼方にあるものと、高をくくって生きている。

まるで自分は死ぬことなどないかのように、^{ぼうじやくぶじん}傍若無人に生を浪費しているのだ。われわれは死に目を背け、死を忌み嫌い、死を無視する社会に生きている。

③死について考えることもないから、高名な宗教家学者でさえ、いざ死に直面すると右往左往、^{しゅうしょうろうばい}周章狼狽して死の恐怖から逃れられない（後述3）。

だが、「死後にもあの世がある」と考える人々は、死を恐れないという。本当に死は恐ろしいのだろうか？

かつて、古人们は死の恐怖を克服しようと数千年をかけて戦ってきた。本稿では、こうした先人たちの「生きざま」と「死にざま」を見ていく予定である。

1 西行の「理想の死」

①最後を迎えるにあたって、死を恐れることなく、死を受け入れて亡くなった2人の詩人があった。西行と蕪村である。

西行は、裕福な武士の出身で、才氣あふれる人物だったが、23才の時に妻子を捨てて出家し、死ぬまで50年間、遍歴と漂白の旅に過ごした。

彼の桜への思い入れは尋常ではなかった。桜を歌い続けて、終生倦むことがなかった。

はな に 染 む ^そ 心のいかで 残りけん 捨て果ててきと 思ふわが身に。

(出家して世俗への執着は捨てたはずなのに、桜を思うと花に染まり、身も心も花と一体となってしまう。この世捨て人に、桜への思いがなぜこれほど残っているのか)。

②桜を歌った西行の歌は多いが、最も有名なのは次の二首だろう。

ねがはくは 花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ

桜の花が咲き誇る旧暦の春2月、お釈迦様の命日である満月の夜に死にたい。

死期を知ったら、生涯愛してやまなかつた桜に囲まれて死にたい。

それが西行のかねてからの望みだった。

③望み通り、西行は1190年(建久元年)旧暦の春2月16日、河内国の弘川寺で桜に抱かれて息を引き取った。煌々と輝く満月の下、咲き誇る緋桜に囲まれた最後。そこに悲壮感はなく絵画的な美しささえ感じられる。

西行の「理想の死」は、当時の人々に大きな衝撃を与えた。

④弟子の藤原秋実は、『西行花伝』(辻邦生著)で西行の最後をこう描いている。

師はできる限りのことを成し終えて、いまここに横たわっている。思い残すこともなく、大いなる眠りにつこうとしている。そこに暗いものは何一つなかった。

桜は気品ある華麗な美しさで咲いた。

師西行はこうして満月の白く光る夜、花盛りの桜のもとで、73年の生涯を終えた。

⑤山折哲雄さん(宗教学者・評論家)は、西行の死は断食死だったと考える。

当時、死期を悟った多くの往生者は、断食して死んだ。西行も、また、これに倣ったのだろう。

死ぬ時期と死に方は自分で決める。お釈迦様の命日に死ぬ。それこそ彼の理想の死であった。

桜に耽溺して生涯を送った西行は、現代人のような死への恐怖を抱かなかった。

桜の花の下で死ぬことは、彼の生き方そのものだった。

2 蕪村の浄土

①俳人の与謝蕪村も死を恐れなかった。

1783年（天明3年）の年の秋頃から、蕪村は病に伏せっていた。12月24日の夜は病状も落ち着き、言葉もはっきりしていたが、翌25日の明け方に病状は急変した。

死期を悟る蕪村は門人を呼び、辞世の3句を詠んで、68才で眠るように息を引き取った。

辞世の句は、あまりにも美しい。

しら梅に 明くる夜ばかりと なりにけり。

②白梅の季節がやってきた。

夜明けの薄闇に白梅がほのかに香り、夜の帳が静かに消えて夜明けが近づいてくる。
早咲きの白梅が咲き始めた。美しい世界はすぐそこまで来ている。

③白梅の花は、ごく小さく密集して咲く。障子越しに見たのであろうか。白梅はまるで夜の海に輝く夜光虫のように、視界を覆いつくしたであろう。白梅の馥郁たる香りも、蕪村の心を鎮めた。春はそこまで来ている。

④紅梅とは違い、白梅にはある種の夢幻的な雰囲気が漂う。抜けるような純白の花びらは、浄土のイメージをかき立てる。

蕪村にとって、浄土は彼方にあるのではなく、白梅の咲く庭そのものが浄土だった。今この場が浄土だった（唯心の浄土）。

⑤蕪村は目の前の浄土を美しく歌い上げて逝った。肉体的には辛かっただろうが、死への恐れはなかった。死ぬ恐れより、花鳥風月への想い、美への憧憬が打ち勝った。

こうして、蕪村の作風から考えるとやや意外な、耽美的な一句を辞世に残した。

蕪村の死に方も理想の死の一つであろうか。

3 ある宗教学者の死

①ところが現代では宗教学の権威でさえ、死の恐怖に打ち勝てない。

1964年（昭和39年）、宗教学者の岸本英夫東大教授（1903-1964）の『死を見つめる心』がベスト・セラーとなった。

博士は客員教授として米国滞在中に皮膚ガンにかかり、あと半年の命しか保証できないと告げられた。51歳の時である。以来10余年間苦しみ抜いた末に亡くなったが、同書には死の恐怖が色濃く見られる。博士ほどの宗教学者でさえ、死に出会う心構えが全くできていなかつた。

②博士は40代半ばに「生死観四態」を発表するなど、死について数多くの論考を発表してきたが、それは「他人の死」に関わる分析だった。

自分がガンと宣告された時、^{ひとごと}他人事のような考察は何の役にもたたなかつた。

「自分の死」を見つめることは、宗教学者にとっても耐えがたい苦痛だった。

③死への恐怖が筆舌を越えたすさまじさで迫ってきた。

言葉を絶する生命飢餓状態におかれ、心身は^{たぎ}滾りたち荒れ狂つた。

まっくらな大きな暗闇その口を大きくあけて迫つてくる前に、わたしはたつて
いた。わたしの心は、生への執着で張り裂けるようであつた。

④博士ほどの該博な知識をもつても、死ぬ恐怖には立ち向かえなかつた。

「死の恐怖」は長い間、博士を苦しめ続けた。10年近く苦しみ抜いたあげく、博士はやつと新しい心境に至る。

死を実体と考えるのは人間の錯覚である。死は実体ではなく、実体である生命がない場所というだけのことである。

自然現象の暗闇というものはそれ自体が存在するものではない。光がないというだけのことである。

⑤わたしが同書を読んだのは、出版後10数年がたつていた。当時わたしは30代始めだつたが、博士の死生観に裏切られた思いだつた。「死という実体はない」という認識に至るまで、そんなにもがき苦しむのか。宗教学者なら、死を乗り越える思想を当然持つてゐるはずではないか。宗教学が死に太刀打ちできないとすれば、何のための学問か。

⑥わたしは20代にすでに「肉親の死」を経験していた。その経験からも「死の恐怖」と「死に至る苦痛」は何の関係もないと確信していた。

死に至る苦痛は時に耐えがたいが、死自体は見ることも触れることもできない。だから、恐れる必要もない。「死」に実体はなく、ただ言葉のあやにすぎない。そう考えていた。

⑦現代人は、とにかく死ぬのが怖い。死は真黒の暗闇であるとか、虚無であるとか、奈落の底に落ちるとか、暗く恐ろしいイメージが浮かんでくる。このような恐怖に満ちた死のイメージがわたしたちを苦しめる。日ごろ死について考えることもないだけに、死への恐怖は容易に克服しがたい。

しかし、「死は怖い」というのも、伝統、文化、習俗、宗教によって刷り込まれたイメージにすぎないのではないか。本当に死は怖いのか？（続く）